

第62回静岡県西部高等学校演劇協議会発表会

静岡県立磐田南高等学校演劇部 上演台本

午後のホリゾン

作 大庭久幸

《登場人物》

女1 イシハラ ホノカ (演劇部 部長 二年生)
女2 コジマ サクラ (演劇部 二年生)
女3 モリオカ ユイ (演劇部 一年生)
男1 オオクボ ハルキ (演劇部 二年生)
男2 サメジマ ソウタ (演劇部 二年生)

《とき》

九月下旬の金曜日 午後四時頃

《場所》

ある街の公共ホール

※場面分けは稽古の際の便宜上のものである。

0

観客がホール内に足を踏み入れると、既に緞帳は上がっている。
客電は点灯していて、舞台上の明かりは消えている。

* * *

白いホリゾン幕を背景とした舞台上には何も無い。
何もない舞台は美しい。

ここでは、何でも起こり得るから。

人生の、あらゆる感情が体験できるから。

そして、ドラマが終われば、静寂が全てを包み込んでくれるから。
静寂であることは、平和である。

* * *

しばらくして、客電が消える。

舞台上に明かりが入る。

開演。

上手袖から男1が登場する。

夏の制服姿で、CDラジオを持っている。

舞台中央付近で止まる。

CDラジオを床に置く。

男1 : 「廃墟で踊る。地平線に向かって踊る。明日のために。」

男1は、CDラジオで音楽を再生する。
音楽。(Nat King Cole 「Smile - Remastered 1992」)

* * *

男1は、音楽に合わせて身体(からだ)をゆっくり揺らす。
ダンスをしているつもりなのだろうか？
しばらくして、舞台上に仰向けに横になる。

男1 …。

客席奥の扉から、女3が入ってくる。

白いパーカーを着ていて、ジーンズを履いている。

パーカーのフードをかぶっているので、顔は見えない。

* * *

女3は、ゆっくりと舞台に近づく。

舞台のすぐ近くまで来て、横になっている男1を見ている。

男1は、女3に気付いていないようだ。

女3 …。

しばらくして、女3は再び歩き出し、舞台下手側の客席扉から退場する。

男1は、上半身を起こす。

音楽の再生を止める。

男1 あれ？…なんか、…誰か、いた？

1

下手袖から、女2と女1の声が聞こえてくる。

女2 …てことは、タカハシくんって、お母さんのお腹の中から出るの、遅かったのかもしれないね。

女1 タカハシくん？

男1は、跳ね起きる。

CDラジオを持って上手袖に退場する。

女2と女1が登場する。

運動着姿。(Tシャツにジャージ等)

女2 いたの、そういう男子が、中学校の同級生に。

女1 ああ。

女2 でさ、そのタカハシくんって、すっごく毛深くてね、なんか、体じゅうが黒かった。

女1 え、色黒ってこと？

女2 じゃなくて、だから、体じゅうに毛が生えてて…。

女1 うわっ。(と、不快感を露わにする)
女2 もう、体じゅうモジヤモジヤ。
女1 それじゃあ、サルじゃん。
女2 そうそう、体育の時間なんか、サルが体操服着てるみたいだった。
女1 うわっ。(と、更に不快感を露わにする)
女2 で、ついたあだ名が「ケムジン」。
女1 は？
女2 だから、「ケムジン」。
女1 どういう意味？
女2 分かんない。あたしがつけたわけじゃないし。「毛むくじゃら」ってことじゃないの？
女1 ああ。
女2 タカハシくんって、お母さんのお腹の中で、サルみたいになってから、出てきたってことでしょ？
女1 動物の体の毛って、母親のお腹の中で、頭からだんだん生えてくるんだって。でも人間は、頭にだけ生えたところで、早めに出てきちゃうらしい。
女2 わざわざ成長しきらないで、早めに出てくるってこと？
女1 うん。
女2 でもさ、なんで早めに出てきちゃうの、人間は？
女1 その方が、頭が大きいから。脳みそが発達しやすいんだって。
女2 ああ。
女1 ほら、赤ちゃんって、頭、大きいじゃん、体の割に。
女2 タカハシくんなんか、お母さんのお腹の中に、二年ぐらい入ってたのかもね。
女1 それはない。
女2 普通はどれぐらいだっけ。九ヶ月？
女1 二年も入ったら、お母さんのお腹、破裂しちゃう。
女2 てことはさ、サルの未熟児ってこと、人間は？
女1 まあ、そうとも言えるけど…。
女2 人間って、もともと未熟な生き物なんだね。
女1 え？
女2 あれ、なんかあたし、いいこと言った？

男1が舞台上手に登場する。

男1 ウキーツ！
女1・2 …。
男1 ウホッ、ウホッ、ウホッ。(どうも、サルの真似らしい)
女1 …オオクボくん、来てんだ？
男1 ウキーツ！
女1 「ウキーツ」はいいから。
男1 ウホッ、ウホッ。
女1 「ウホッ」もいらない。
男1 あ、なんか、サルの話してたから…。
女2 …サメジマくんは？
男1 え？
女2 まだ、来てない？

男1 あ、分かんないけど…。
女1 悪いけど、男子は控室ないから。
男1 あ、そうなんだ。
女1 先生、男子はその辺で着替えりゃいいだろうって。部費の節約ってことで。
男1 まあ、いいけど。

男1はワイシャツを脱ぎ始める。

女1 ここで着替えないで！
男1 え？
女2 ここはダメ。
男1 だって、その辺で着替えりゃいいって言うから…。
女2 「その辺」と「この辺」は違う。
男1 ああ。
女1 でさ、五時には、ここ出なきゃいけないから。あんまり時間ないから。
男1 え、一時間しかないじゃん。
女1 しょうがないよ、授業終わってからだと、この時間になっちゃうし。
女2 本番前に、少しでも広いところで練習したいって言って、ホールを予約してもらったんだけど、今日しか空いてなかったみたい。
女1 もう、明日はリハーサルだよ。
女2 まあ、それでも、練習できないよりはいいし。
女1 ここで一時間練習して、学校戻って、積み込みだから。
男1 ウキーン！
女1 …まあ、とにかく着替えてきて。
女2 悪いけど、「その辺」で。
男1 ウキーン！

男1は、上手袖に退場する。

女2 なにふざけてんの、あいつ？
女1 じゃなくて、あれで気合い入ってるつもりなんだよ。
女2 ウキーンで？
女1 あいつこそ、サルのままで出て来たんじゃないの？
女2 ハハ、かもしんない。

男1が、再び上手袖から登場する。

女1 あ。
女2 なに？（振り返る）
女1 どうしたの？
女2 早く、着替えてきてよ。
男1 あのだ。
女1 え？
男1 ここって、出るらしいよ。
女1 は？

男1 なんか、そういう噂。
女2 出るって？
男1 だから…。

男1は、体の前で両手をブラツとさせる。

女1・2 え？

男1 誰もいない客席に、白いものがフラツと現れるらしい。

女1 ちよつと、やめてよ、そういう話は。

女2 あれ、ホノカだめなんだ、そういう話？

女1 だって、気味が悪いじゃん。

男1 でさ、なんか、さつき、気配感じた。誰もいないに。

間。

女1 : オオクボくんって、靈感強いの？

男1 そんなに強くないよ。普通かな？

女1 フツウ？

男1 普通ぐらい。

女2 あのさ、靈感って、あるかないかで、普通ってのは、ないんじゃないの？

男1 え、そうなの？

女2 あたしは、全然ないけど…。

女1 ああ、サクラは神経太そうだから。

女2 え、そうかな？

男1 気を付けた方がいいよ。普通のオレでも、なんか感じたし。

女1・2 …。

男1 ほら、そこっ！

男1は下手袖を指さす。

女1 やだっ！

女1は、しゃがみ込んでしまう。

男1 ウソぴょん！

男1は上手袖に退場する。

女1 バカッ！

女1は、男1を追って上手袖に入る。

女2 「ウソぴょん」って、今どき使うか？

女1が、上手袖から戻って来る。

女1は、CDラジオを持っている。

女1 …あとで、ぶつ殺す。

女2 あ、それって…？

女1 袖にあった。うちのだと思っ。

女2 オオクボくんが、持ってきたのかな？

女1 分かんない。

女2 ちよつと貸して…。

女2は、女1からCDラジオを受け取る。

女2 あ、やつぱり、うちのだ…。

女1 あのさ、わたし、中学校のときに、ちよつと不思議なこと経験してさ…。

女2 え？

女1 だから、ちよつとホラー的な？

女2は、CDラジオを床に置く。

女2 ホノカ、靈感あるじゃん。

女1 て言うか、わたしだけじゃなくて、クラスみんながなんだけど…。

女2 え、どんな経験？

女1 中学二年の夏休みに、夏合宿つてのがあって、クラスごとに泊まるんだよね、なんか宿泊所みたいところに。

女2 ああ、うちも、似たようなの、あったあつた…。

女1 でね、夜、キャンプファイアーやって、フォークダンスするんだけどね…。

女2 おお、まさにアオハル。

女1 大きな輪になって、男女がペアになって、相手が代わってくやつ…。

女2 なんか、昭和だね。

女1 今どき、フォークダンスなんか、普通はやらないんだけど、うちの学校、やること昭和のままだから…。

女2 仕方がないよ、田舎だし。

女1 でき、一回踊って、担任が、もう一回やろうって言い出して、みんな、もうイヤだつただけど、担任が、どうしてもやろうって言うから、もう一回踊ったんだけどね…。

そしたら、一回目のときと、違う人とのペアで終わってさ。

女2 え、どういうこと？

女1 だから、一回目のときと、違う人と踊って終わったの。

女2 踊り始めが違えば、終わりも違うじゃん。

女1 それが、一回目のときと、同じ人と始めたんだよ。

女2 不思議だね。

女1 で、男子が途中で一人増えたんじゃないかって、言い出す子がいて…。

女2 でもさ、途中で一人増えれば、ペアにならない子が出てくるじゃん。

女1 だから、それが不思議なんだよ。

女2 え、その一人増えたのって、幽霊ってこと？

女1 なのかな？

女2 こわっ。

女1 でき、それ以来、そっち系の話は、ちょっと弱くてき…。

女2は、CDラジオで音楽を再生する。

音楽。(Nat King Cole 「Smile - Remastered 1992」)

女2 …今回の劇で、踊るよ、この曲で。

女1 うん。

女2 大丈夫？

女1 ちょっと微妙。

女2 今まで、そんなこと言わなかったじゃん。

女1 そんなこと？

女2 だから、幽霊と踊ったってこと。

女1 踊ってないよ、幽霊とは。

女2 え、だって、そういうことじゃないの？

女1 そうは、思いたくない。

女1と女2は、音楽を聴いている。

女2 リヨウスケ先輩の台本ってき、難しいよね。

女1 そうかな？

女2 大会の台本、先輩が書いてくれたのはいいけど、やっぱり、ちょっと難しくくて…。

女1 まあ、わたしも、分かんないとこあるよ、少しは。

女2 あたし、戦争とか、差別とか、よく分からないし…。

女1 でも、質問すれば、教えてくれたよ。

女2 戦争で廃墟になった高校で、高校生たちが卒業式にダンスを踊る…。

女1 なんか、それが、その国での伝統なんだって。

女2 テレビのニュースで見たんじゃよ？

女1 うん、そうらしい…。

女2 高校時代の思い出と、これからの人生のために、ダンスを踊る。

女1 「廃墟で踊る。地平線に向かって踊る。明日のために。」

女2 あたしき、よく分からないけど、その台詞は好きだよ。

女1 うん。

女2 踊ろうか？

女1 え？

女2 だって、ほら、練習でしょ？

女1 ああ。

女2 で、中二のときのトラウマにもサヨナラしよ。

女1 別に、トラウマってほどじゃないけど…。

女2 じゃあ、ほら、踊ろ。

女2は、女1の手を取る。

女1と女2は、音楽に合わせて踊る。

男2が、下手袖から登場する。
運動着姿（Tシャツにジャージ等）

男2は、大きなダンボール箱を、三つ積み上げて抱え持っている。
見た目には、極めて不安定だ。

ダンボール箱には、ヒマワリの絵が描（か）かれている。
下の二段にはヒマワリの茎と葉が描（か）かれ、一番上の箱には花が描（か）か
れている。

男2は、しばらく、女1と女2のダンスを見ている。

女2 あ。

女1 え？

女2 サメジマくん、来てたんだ？

女2は、音楽の再生を止める。

男2 あ、ゴメン。練習中だった？

女1 別に練習ってわけじゃないけど…。

男2 でも、ダンスの練習だよね？

女2 それ、持ってきてくれたんだ？

男2 え？

女2 その箱。

男2 あ、うん。

女2 学校から持ってきてくれたの？

男2 あ、まあ…。

女2 ずっと、そうやって？

男2 そうやって？

女2 だから、そうやって、…抱えて？

男2 あ、まあ、そうだけども…。

女2 大変だったね。

男2 風が吹くと、飛ばされそうになった。

女2 ありがとう。

男2 あ、うん…。

女1 さすが、サメジマくん。オオクボくんとは違うね。

男2 そうかな？

女1 違う、違う、全然違う。

男2 でも、ハルキが、そのCDプレーヤー持ってきて言うから。

女1 ああ。

男2 今日、カモさん、来ないんですよ？

女1 あ、うん。今日は都合が悪いって。

女2 リハでいきなりか…。

女1 え？

女2 スズちゃん、リハでいきなりで、大丈夫かな？

女1 昨日（きのう）、打ち合わせしたよ。

女2 まあ、そうかもしれないけど…。

男2 カモさん来ないなら、オレが持ってた方がいいかなって…。
女1 オオクボくん？
男2 うん。
女2 一応、考えてるんだ、そういうこと。
男2 だから、ボクも何か持ってた方がいいのかなって思ってた…。
女1 ありがとう。
男2 あ、うん…。
女1 その箱、大きいから、持っていくの大変だし、ないならいいかなって思ってたんだけど…。
男2 え、そうなの？
女1 でも、あればあった方がいいから。…ね？
女2 うん。
女1 オオクボくんが、着替え終わったら練習するから。
男2 ハルキ、着替えてるの？
女1 そちら辺で、着替えてると思う。それにしても、遅くない？
女2 そう言えば、そうだね。
男2 あのさ…。
女1・女2 え？
男2 ホールの人が、呼んでるみたい。
女1 ホールの人？
男2 部長さん、いますかって？
女1 え、わたし？
男2 なんか、用事があるみたい。
女1 なんだろ？
女2 さあ。
女1 なんだって？
男2 あ、ボクもよく分からないけど。
女2 なんか、手続きとかあるのかな？
女1 だって、さっきこの鍵借りたときには、何も言わなかったよ。
女2 だよね。
女1 行った方がいいかな？
女2 だって、呼ばれてるなら…。
男2 行った方がいいよ。
女1 じゃあ、ちよつと行ってくる。

女1は下手袖に退場する。

女2 …それ、置いたら。
男2 え？
女2 その箱。
男2 ああ。
女2 重いでしょ？
男2 軽いよ。空だし。
女2 まあ、そうかもしれないけど。
男2 あのさ…。

女2 え？
男2 ちよつとシビれてきた。
女2 シビれた？
男2 手が…。
女2 だから、置きなつて言ったじゃん。
男2 どこ？
女2 え？
男2 どの辺？
女2 あ、その箱？
男2 うん。
女2 えつと、どの辺かな…？
男2 教室での練習のときは、だいたい真ん中だったけど…。
女2 てことは、この辺かな？

女2は、舞台の中央奥のあたりに移動する。

男2 あ、うん。

男2も移動して、ダンボール箱を置こうとする。

女2 気を付けて…。
男2 うん。

床面に置こうとしたが、ダンボール箱は崩れて、床面に転がる。

男2 あ、ごめん。
女2 ハハハ。積んだままじゃ、無理だったね。

女2と男2は、転がったダンボール箱を拾って、積み上げる。

女2 …こんな感じか。
男2 これさ、ヒマワリに見えるかな？
女2 え？
男2 ハルキがさ、なんか菊の花に見えるって…。
女2 ああ、そう言われれば、確かに…。
男2 え、そう見える？
女2 でもさ、菊はこんなに高くないでしょ、丈(たけ)がだよ。
男2 大丈夫、見えるよ。サメジマくん、上手に描(か)いたよ。
女2 廃墟に菊の花じゃ、お葬式だって言われた。
女2 え、誰に？
男2 ハルキに。
女2 オオクボくんの言うことなんか、気にしちゃダメだって。
男2 廃墟にヒマワリの種を撒(ま)くってさ、「再生」の象徴なんでしょ？
女2 らしい。

男2 リヨウスケ先輩が言ってた。
女2 「廢墟で踊る。地平線に向かって踊る。明日のために。」
男2 で、ヒマワリの種を撒(ま)く。
女2 それが、「明日のために」ってことだよね、たぶん？
男2 この、リヨウスケ先輩のアイデア好きだなあ〜。
女2 一人ずつ、箱を持ってきて積んでいく。
男2 そして、最後に、大輪のヒマワリが咲く。
女2 うん…。

男2と女2は、床に腰を下ろす。
箱に描(か)かれたヒマワリを、二人で並んで見つめている。
少しして、男2は、女2の方に視線を移す。

男2 きれいだね…。
女2 え？

女2は、男2の方を見る。
二人の視線がぶつかる。

男2 あ、えっと、…きれいだなあて、このヒマワリ。
女2は腰を下ろしたまま、男2から少し離れる。

男2 ハハハ、自分で描(か)いといて、自画自賛だけど…。
女2 …。
男2 ハハハハ…。

変な間。

男2 あのさ…。

男2は、腰を下ろしたまま、女2に近づく。

女2 え？
男2 あ、なんでもない…。

女2は、腰を下ろしたまま、少し離れる。

男2 …。

男2は、腰を下ろしたまま、女2に再び近づく。

女2 …。

女2は、離れようか迷うが、諦める。

再び、変な間。

女2 ホノカ、遅いね。
男2 あ、うん…。
女2 オオクボくんも…。
男2 あの…、ラーメンって好きかな？
女2 え？
男2 あ、いきなりだけど、ラーメン。
女2 まあ、嫌いじゃないけど…。
男2 うちの近所に、ラーメン屋があってね。
女2 は？
男2 あ、あるの、ラーメン屋。
女2 なんていう？
男2 え？
女2 なんていう、ラーメン屋？
男2 あ、…名前は分かんない。
女2 え、知らないの？
男2 昔からあるから、名前なんか、考えたことなかった。
女2 あ、そう。
男2 そうか、なんて名前なんだろう、あのラーメン屋？
女2 で？
男2 え？
女2 そのラーメン屋が、どうしたの？
男2 その店に、「ウルトラメン」ってのがあってね…。
女2 は？
男2 「ウルトラメン」。壁にメニューが貼ってあるんだけどね、「ラーメン」「チャーシューメン」「タンメン」「タンタンメン」なんて書いてあって、で、最後のところに「ウルトラメン」ってあってね…。
女2 …。
男2 どんなラーメンなんだろうって、前から気になってたんだけどね、それで、頼んでみたの、この前…。
女2 …。
男2 で、出てきたのは、見た目は普通のラーメンなんだけね、どんな味なんだろうって、食べてみたら、思わず叫んじゃった、「ジユワッ！」って。
女2 …。
男2 ていう、話なんだけど…。
女2 どういうこと？
男2 え？
女2 どうして叫んだの？
男2 あ、だから、叫びたくなるような味っていうか…。
女2 …そうなんだ。
男2 あ、うん。そういう味…。

三度目の、変な間。

男2 ツカミのギャグには、もってこいだと思ったのにな…。
女2 え？
男2 あ、なんでもない…。
女2 あたし、ちよつと…。
男2 え？
女2 あ、ちよつと…。

女2は、立ち上がって、上手袖に退場しようとする。

男2 え、ちよつと、なに…？

女2は、上手袖に退場する。

それを追って、男2も上手袖に退場する。
しばらく、舞台上には誰もいない。

3

女1が、下手袖から登場する。

女1 あれ？

誰もいないので、ダンボール箱に描(か)かれたヒマワリを見ている。

女1 …なんか、ほんと、菊の花みたい。

男1が、下手袖から登場する。

男1は、運動着姿(Tシャツにジャージ等)に着替えている。

男1 ウキーン！
女1 …。
男1 ウホッ、ウホッ。
女1 しっこい。
男1 ごめん。
女1 しっこい男は、嫌われるよ。
男1 お待たせ、しまうま。
女1 いちいち、ギャグにしなくていい。
男1 ごめん。
女1 サクラ、知らない？
男1 え？
女1 あと、サメジマくんも。
男1 ソウタ、来てるんだ？
女1 うん。これ持って…。

女1は、ダンボール箱を指さす。

男1 てことは、そろったってこと？
女1 でも、いないんだよね。どこ行ったんだろ？
男1 トイレにでも、行ってんじゃないの？
女1 スズちゃんは、今日は都合が悪いって。
男1 知ってる。だから、オレ、CDプレーヤー持ってきたんだから。
女1 あと、リヨウスケ先輩は、来るはずなんだけど…。
男1 モリオカさんは？
女1 え？
男1 て、来るわけないか…。
女1 あの子、ホールの人が呼んでるって言うから、行ったんだけど、呼んでなかった。
男1 は？
女1 だからね、ホールの人が呼んでるって、サメジマくんが言うから行ったんだけど、呼んでなかった。
男1 なんだ、それ。
女1 ほんと、なんだそれって感じ。
男1 呼んだの、幽霊かもしれないよ。
女1 え？
男1 ここ、出るから。
女1 もう、やめてよ。
男1 ハハ、怖がりだなあ。
女1 今度言ったら、ぶつ殺す。
男1 菊の花もあるし…。
女1 これ、ヒマワリだよ。

女1と男1は、再びダンボール箱に描(か)かれたヒマワリを見る。

男1 ホリゾント…。
女1 え？
男1 ほら、ヒマワリの後ろにある幕。
女1 ああ、ホリゾント幕でしょ？
男1 ドイツ語で、「地平線」って意味なんだって。
女1 そうなんだ。
男1 まあ、リヨウスケ先輩から、聞いたんだけどね。
女1 やっぱり？
男1 照明が絵の具の役割をして、どんな背景も作り出す、そんな仕掛けだって。
女1 ほんとだね、ホリゾント幕に、ヒマワリをいっぱい映したかったんだって、プロジェクターで。
男1 それ、オレも聞いた。
女1 すごいだろうね、もし、そうしたら。地平線の向こうまで、ずっとヒマワリが続く。
男1 リヨウスケ先輩、今日は来ないよ。
女1 え？
男1 オレさ、短パン忘れたから、学校戻ったんだよね。
女1 だから、時間かかったの？
男1 部室行ったら、リヨウスケ先輩いてさ、「オレ、今日は行かないから」って。

女1 そうか…。
男1 さすがに、明日のリハは行くって言った。心配するなって。
女1 …。
男1 なんかつた？
女1 え？
男1 リヨウスケ先輩と。
女1 なんかつて？
男1 なんかは、なんかだよ。
女1 昨日、ちよつとね…。
男1 個人的なトラブルを、部活に持ち込んでほしくないな。
女1 え？

女2と男2が、上手袖から登場する。

女2 …だから、怒ってないし。
男2 怒ってるよ。
女2 しつこいなあ、怒ってないよ。

女2と男2は、女1と男1の前を通過する。

女1 あ、サクラ、そろったから、練習するよ…。
女2 ちよつと、ついてこないだよ。
男2 あ、でも…。

女2と男2は、下手袖に退場してしまう。

女1 なに？
男1 なんだ、あいっら…。
女1 どうしたんだろ？
男1 やっぱり、沼にはまったな、あいっ。
女1 え？
男1 だから、個人的なトラブルを、部活に持ち込むなっつゝの。
女1 練習どうしようか？もう、時間がどんどんなくなつてく…。

女1は、何かを感じて振り返る。

女3が、上手袖の辺りに登場していた。

女3は、フードをかぶっていて、顔は見えない。

女1 えっ!？
男1 ?

男1も振り返る。

男1 …え、えっ、出た〜っ!

男1は、舞台上から飛び降り、舞台下手側の客席扉に向かって逃げる。

女1 ちよつと、オオクボくん！

男1は、舞台下手側の客席扉から退場する。

女1 …。

女3は、上手袖に消えていた。

女1 …ユイ？

女1は、引き寄せられるように、ゆっくり上手袖に退場する。
しばらく、舞台上には誰もいない。

* * *

女2と男2が、下手袖から登場する。

女2 …もう、練習しないといけないから。

男2 分かっている。でも、ちよつとだけ、話、聞いてくれないかな？

女2 あれ、ホノカは？

男2 ねえ、ちよつとだけ。

女2 ホノカ、どこ行ったんだらう？

男2 さあ…。

女2 あのさ、まずは、明日のリハと、明後日（あさって）の本番に集中しよ。

男2 あ、うん…。

女2 それまでは、あたし、ほかのこと考えられないから。ただでさえ、ユイのことで、バタバタしてるし。

男2 まあ、モリオカさんのことは、ちよつとね…。

女2 こういうときに、いろいろ言われても、ちよつと迷惑だから。

男2 え？

女2 ほんと、迷惑。

女2は、上手袖に退場する。

男2 …迷惑？

男2は、茫然として立っている。

男2 迷惑か…。

男2は、積み上げられたダンボール箱に近づく。

男2 くそっつ！（と叫ぶ）

男2は、ダンボール箱を蹴る。

ダンボール箱は崩れて、床に転がる。

男2
∴。

男2は、ヒマワリの花が描(か)かれたダンボール箱に近づき、その中に入って
しまう。

まるで、全てのことから逃避するために、殻(から)に閉じこもるように。
しばらく、舞台上には誰もいない。

* * *

男1が、下手袖から、舞台上の様子をうかがいながら登場する。

男1 ∴すいませんでした、女子を一人残して逃げてしまつて。イシハラさん、怖がらせ
ようと思つて言ったことが、ホントになつて、ちよつとビビっちゃつて∴。て言うか、
あれつて、本物？

男1は、舞台中央付近まで出て来て、辺りを見回す。

男1 なんだ、いないのかよ∴。

男1は、転がっているダンボール箱を見る。

男1 崩れてるじゃん。

男1は、ダンボール箱を再び積み上げようとするが、三つ目のダンボール箱が重
くて持ち上がらない。

男1 あれ？

男1は、ダンボール箱を持ち上げようと試み続ける。

男1 なんだ、これ？∴何、入つてる？

男1は、ダンボール箱を開けようとする。
突然、男2が、ダンボール箱の中から出る。

男1 ギャーッ、出たーっ！

男1は逃げようとする。

しかし、男2が、両足をダンボール箱の中に入れたまま立っているのに気づく。

男1 え？

男2 ∴。

男1 なんだ、ソウタ、びつくりさせんなよ。

男2 ∴。

男1 あのさ∴。

男2 え？
男1 おまえ、なんか、ちょっと…、なんて言ったらいいのかな？なんか、…浮ついてない？
男2 そんなこと、ないよ。
男1 なんか、なんで、ここにきて、リア充、もくろんでる？
男2 もくろんでないよ。
男1 いやいやいや、なんか、オレから離れてくもん。
男2 は？
男1 なんか、そんな感じ。
男2 て言うか、もともと、ハルキとくつついてないし。
男1 いや、くつついてはいないけどさ、同じ部活の仲間としてさ、あるわけじゃん、友情？
男2 いや、ハルキとは、友情とか、あると思っただけだし。
男1 え？
男2 普通の付き合い。
男1 普通の付き合い？
男2 うん。普通の付き合い…。
男1 …。
男2 まあ、友情より、愛情に目覚めたっていうか？
男1 …。
男2 そんな感じかな…。
男1 分からない。
男2 え？
男1 おまえの言うことは、分からない。
男2 は？
男1 …ドカッン！

男1は、転がっていたダンボール箱を、男2に投げつける。

男2 あっ！

男2は、ダンボール箱から出る。

男1 ドカッン！

男1は、更にダンボール箱を男2に投げつける。

男2 やめろよ！

男1 ドカッン！

男1は、ダンボール箱の攻撃を繰り返す。

男2も、ダンボール箱を投げて応戦する。

男2 ドカッン！

男1 ドカッン！

男1と男2は、互いにダンボール箱を投げ合う。

男2 ドカッン！
男1 ドカッン！

戦いはエスカレートしていく。

男1 ドカッン！

男1は、ダンボール箱を投げつけて、上手袖に退場する。

男2 逃げるな！

男2は、男1を追撃しようと、ダンボール箱を一つ持って、上手袖に退場する。
* * *
しばらく、舞台上には誰もいない。

4

女3が下手袖から登場する。

女3は、フードをはずす。

女3 …？

女3は、転がっているダンボール箱を気にしながら、舞台中央奥まで歩いていく。
ゆっくり客席の方を見て、舞台の上に座る。(いわゆる、体育座り)
しばらくして、女1が下手袖から登場する。

女1 …ユイ。

女3は、女1の方を向き、立ち上がる。

女3 こんにちは…。

女1 …。

女2が、上手袖から登場する。

女2 え？

女3は、女2の登場に気付いていないようだ。

女3 …今日は、ここで練習って、LINEで、サメジマ先輩から。

女1 サメジマくんが？

女3 はい。

女1 なんて、そんなことしてんの、あいつ…。

女3 あ、なんか、リョウスケ先輩からLINEするように言われたみたいで…。

女1 先輩が？

女3 サメジマ先輩、時々、連絡くれるんで…。

女1 …。

女3 …すいませんでした。

女1 え？

女3 ずっと、練習、来なくて…。

女1 …。

女3 明日は、学校行って、部活出ようって思っんですけど、朝になるとダメで…。

女1 …。

女3 目を覚ますと、深い谷底に横になってる感じで。なんか、深い穴の中にいるみたいで、

這(は)い上がれなくて、…怖くて…。

女1 …。

女3 音響、代わりが見つかったんですね？

女1 …。

女3 もしよければ、その人と一緒にやれたらいいなって…。

女1 …。

女3 サンプラーの使い方とか、教えられたらいいなって…。

女1 なんて？

女3 え？

女1 なんて、そんなこと言える？

女3 …。

女1 今さら、なんで、そんなこと言えるの？

女3 …。

女1 ほんとに、大変だったんだから。音響、代わりにやってくれる人、なかなか見つから

ないし、先生に相談しても、埒(らち)があかないし、先輩とは言い合いになるし…。

女2 ホノカ…。

女3は、女2に気が付き、軽く会釈をする。

女1 …先輩は、なんとか連れ戻した方がいって言って。でも、連絡しようとしても、既

読にもならないし…。

女3 すいません…。

女1 ユイのせいで、みんなバラバラになった。

女3 え？

女1 なんか、部活が…そんな感じがする。

女3 ごめんなさい。

女1 …。

女2は、女3に近づこうとする。

女3 そうですよね…？

女2 え？

女3 ひどいですよね、わたし。

女2 ユイ？

女3 ずうずうしいですよ、今さら。…すいませんでした。

女3は、上手袖に退場しようとする。

女2 ユイ！

女3は、上手奥袖の辺りで立ち止まる。

女3 …明日のリハーサル、がんばってください。

女1・2 …。

女3 あと、本番も…。

女1・2 …。

女3 …じゃあ。

女3は、上手奥袖に退場する。

女2 ユイ！

女2は、女3のあとを追おうとする。

女1は、両手で顔を覆い、しやがみ込んでしまう。

女2 ホノカ？

女1 …。

女2 ホノカ、大丈夫？

女2は、女1に駆け寄る。

女1 …。

女2 ホノカ…。

女1 わたし、ひどいこと言ったよね？

女2 え？

女1 なんてだろ？

女2 …。

女1 なんて、あんなこと言ったんだろ？

女2 …。

女1 あんなこと、言うつもりなかったのに。「おかえり」って、なんで言えなかったんだろ
う？

女2 いろいろあって、疲れてるんだよ。

女1 でも、部長だよ、上級生だよね？

女2 ホノカ…。

女1 なんて、あんなこと言ったんだろ？

女2 あんまり、自分を責めない方がいいよ。

女1 ダメだ。わたしってダメだ。

女2 ホノカ…。

間。

女2 ウキーン！
女1 ?
女2 ウホッ、ウホッ。
女1 ?
女2 ウホッ、ウホッ。
女1 サクラ…。
女2 ウキーン！

間。

女1 …下手くそ。
女2 ひど。
女1 笑わそうとしてる？
女2 一応。
女1 もう、信じらんない、こんなときに…。
女2 ハハハ、ごめん。
女1 全然、励ましになってない。
女2 ハハハ、だからごめんって。
女1 でも、…ありがとう。
女2 人間は、もともと未熟なんだから。未熟なまま生まれてくるんだから…。
女1 …うん。
女2 「さっきは、ごめん。本番は是非見に来て」って、LINEしようよ。
女1 でも、既読つくかな？
女2 男子にやらせるから。サメジマくんなら、既読つくかもしれないよ。「部長が、謝ってる。本番は見に来てほしいって言ってる」って、送らせるから。
女1 サメジマくん、やってくれるかな？
女2 今なら、あたしの言うことは、なんでもきくし。
女1 え？
女2 あたしの、しもべだから。て言うか、下僕(げぼく)レベル。
女1 どういうこと？
女2 まあ、男子は単純ってことかな。
女1 よく、分かんないけど…。
女2 とにかく、あたしにまかせて。
女1 ありがとう。

男1と男2が、上手袖から登場する。

男1は、CDラジオを持っている。

男2は、ダンボール箱を持っている。

男2は、女1、女2、男1の輪の中から、少し離れて立つ。

男1 …お、そろってるじゃん。
女2 て言うか、あんたたちが、どっか行ってたんでしょ？
男1 いやいや、それはお互い様だし。で、練習する？

女2 どうしようか？
女1 もう、時間ないよ。
女2 そっか、五時までか？
男1 学校戻って、積み込みもあるんだよね？
女2 先生、覚えてるかな？
女1 それが心配。
女2 もう、帰ってたりして。
女1 サメジマくん？
男2 …え？
女1 どうしたの？
男2 どうもしてないけど…。
女1 なんか、元気ないみたい。
男2 そんなことないよ。
男1 大丈夫、ソウタの苦しみは、オレが共有したから。
女1 は？
男1 分かり合えたから。
女1 わけ、分かんない。
男1 やっぱり、ことばを交わすことは大切だよ。ことばが世界を救うこともあるからな。
男2 あ、うん。
男1 ほら。
男2 え？

男1は、男2に近づきハグしようとするが、お互いに物を持っているので、うま
くいかない。

男2 …もう、いいよ。
男1 男って、不器用だから。
男2 …。
男1 でも、やっぱり男の友情はいいよなあ。
女2 サメジマくん、お願いがあるんだけど。
男2 へっ！
女2 残りのダンボール箱、学校までいいかな？
男2 あ、うん。ハルキも手伝ってよ。
男1 だって、オレは、ほらこれ。(CDラジオを気にする)
女2 それは、ここに置いてっていいから。あたしたちで、持っていく。
男1 あ、ならいいけど…。(CDラジオを床に置く)
女2 で、あとで、もう一つ、お願いがあるんだけど。
男2 えっ？(喜びの表情)
女2 いいかな？
男2 あ、いいよ。あとで？…あとでね。うん、いいよ。あとでかあ。(と嬉しそう)

男2は、ダンボール箱を二つ抱え持つ。

男2 ハルキ、あと二つたのむ…。
男1 あ、うん。

男1は、ダンボール箱を一つ抱え持つ。

女1 ……なんか、ダンボール箱、壊れてない？
女2 そうそう。
男2 それは、ちよつとね…。
女1 ちよつと、なに？
男2 ちよつと、あつたから。…ね？
男1 ……うん。
男2 でも、もう分かり合えたから。
男1 あ、うん。
女1 ほんと、あんたたち、わけ分かんない。
男2 じゃ、先行ってまゝす。

男2は、ダンボール箱を二つ抱えて、下手袖に退場しようとする。
男2は、下手袖の辺りで振り返る。

男2 ……で、お願いって、何かな？
女2 それは、あとで。
男2 ヒヤッホッ！

男2は、奇声をあげて、下手袖に退場する。

男1 ……なんだよ、仲いいじゃん。あいつ、騙(だま)したな。

男1は、下手袖に退場する。

女2 ほんとに、単純だ。
女1 サクラ…。
女2 え？
女1 明日のリハーサル大丈夫かな？
女2 大丈夫だよ。
女1 本番も。
女2 だから、大丈夫だって。
女1 樂觀的だなあ。
女2 今度の劇で使ってる曲ってさ、古い映画の曲なんだけど、知ってた？
女1 うん。
女2 リヨウスケ先輩でしょ？
女1 そう、教えてくれた。
女2 うまくいかないことばかり続いて、悲しんでる女の人を、主人公が励ますんだって。
「さあ、笑って」って。

女1 うん。
女2 そして、二人で地平線に向かって歩いて行く。
女1 ホリゾント…。
女2 え？

女1 ホリゾン。ほら、地平線。

女1は、舞台奥のホリゾン幕を指さす。

女2 そうか、地平線か…。
女1 「廃墟で踊る。地平線に向かって踊る。」
女2 「明日のために。」
女1 わたしたちって、ダメなところ多くて、いろいろなことがあるけど…。
女2 地平線に向かって、明日に向かって、微笑んでいたいね。

問

女2 …踊ろうか？
女1 え？
女2 練習しよ、ちょっとだけ。
女1 練習か…。
女2 そう、練習しとこうよ。
女1 わたし、なんか、今度のことで、すごく練習した気がする。
女2 え？
女1 なんか、人生の練習っていうのかな？
女2 青春は、練習の繰り返しだから。
女1 え？
女2 あれ、なんかあたし、また、いいこと言った？
女1 踊ろうか。
女2 うん、踊ろう。
女1 明日のために。
女2 ほら、笑って。

女1は、CDEラジオで音楽を再生する。

音楽。(Nat King Cole 「Smile - Remastered 1992」)

* * *

女1と女2は、ゆったりと踊り始める
ときに向かい合って。そして、ときに地平線に向かって。
舞台上の照明が、ゆっくり暗くなっていく。
音楽は続いている。
舞台上の照明が、完全に消えてしまう。
音楽も消えていく。
終演。

おわり

《参考書籍》

台本執筆にあたって、次の書籍を参考にしました。

『子どもと自然』河合雅雄(岩波新書)

『暇と退屈の倫理学』國分功一郎(新潮文庫)